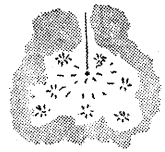


別れについて



谷川俊太郎

人を見送るのはてれくさい、人に見送られるのはもっとてれくさい。少々長い外国旅行に出るときでも、私は家族や友人の見送りを断る。こういう気持はどこから生れてくるのだろうか。何によらず大げさなことがきらいだという性質がある。他人の間で自分が中心になったり、目立ったりするのが苦手だということもある。別れにつきものの、しめっぼさを避けたい心持もある。余り入念な別れかたをするのは縁起がわるいと思っっているようなところもある。だが基本的には、私は別れというものを信じていないのだと言えそうながする。

別れてもまたいつかどこかできつと会える、どんな別れの場でも私はいつも心の片隅でそう思っているようだ。自分に親しい人間の亡くなったときにも、私はもう永久にその人に会えないとは思わない。天国でか地獄でかは知らないがまたその人に出会って四方山話ができると考えている。もちろん悲しみが無いわけではない、悲しみはあるのだがその悲しみのむこうにまだ別

の世界があると、妙に気軽に私は信じている。後生を信じているというより後生への好奇心があると言うほうがいいだろうか。亡くなった人がそこで自分を待ってくれているのではないかというような、淡い期待が動く。

父母もまだ生きているし、私が常人以上に平穩な生活を送っていて、この年になるまで本当に痛切な、身をひき裂かれるような別れの経験をもっていないから、こんな呑気なことを言っていていられるのかもしれない。また、そんなふうには別れというものをわざと卑小化することで、私は別れのもつ怖しい意味から目をそむけ、自分をごまかそうとしているのかもしれない。が、それだけで私の氣持のゆえんを説明しきることにはできないとも、私は感じている。

すべての別れには別れに先立つ、その人と或いはその物とともに生きてきた時間というものがある。その時間はどんなに別れがづらいものであると、その苦しきによって消滅するものでもないし、否定できるものでもない。いつかどこかで出会い、それからの時間をたとえ短くとも、ともに生きてきた経験、それは別れののちも私たちの生きている限り失われはしない。むしろそれは別れののちも、不断によりみがり、深まりさえするのである。

私の心の中には、ともに生きたその経験を別れよりも重く感じとり、重く考えてゆきたいという欲求と希望があるようだ。別れによって打ち砕かれてしまうことのないような充実した経験をもちたい、むしろいつ襲うかもしれない別れを常時意識しているからこそ、ともに生きることのできる一瞬一瞬を

おろそかにしまいとすゝる、そう言いかゑることができらるうか。

或る人と、或る物と別れたのちにもまた新しい他の人や他の物との出会いがあると思つてゐるのではない。そういう考ゑかたは別れを何か相対的な、つまりぬものにしてしまふ。あらゆる別れは、それがどんなに小さな別れであらうとも、とりかゑしのつかぬものである。そういう意味では私たちは日別れを経験してゐる。朝、学校へ出てゆく子どもの後姿を見送つて、これでもう永遠に会ゑないのではないかという、いわれのない不安を一度でも感じなかつた親がゐるだらうか。

生きることは、私たちをそんな氣持にさそうほどにはかないものだ。別れの不安は片時も私たちを離れない。だからこそ私たちの中に、避けることのできぬ別れまでの間を、ともに楽しく充実して生きたいという心持がわくのではないだらうか。別れに悔いはつきものだとしても、その悔いをできる限り小さなものとどめたいと私は思う。

別れを信じない私の氣持の中には、逆に別れまでの時間を信ずる氣持がある。私たちは他人とは別れるが、自分とは決して別れられない。別れることのできぬ自分の中に、別れた人、別れた物がいつまでも生きつづけるというところにも、人生の豊かさの秘密がかくされてゐると私は感ずる。

(原文のまま)